

第9章 彼らは私の顔を引っ叩きたかった

—おー、悪役、微笑んでいる、忌まわしい悪役！

そなたは微笑み、そして微笑み、悪役になる。—

1964年の晩秋、UNCLEの大騒動が始まる前、ソ連の陸上チームが国際競技会のためにカルフォルニアを訪れ、MGMのお偉方が彼らをスタジオでの昼食に招待しました。これは当時冷戦がもたらした緊張により東西の交流が少なくなっていた時だったので、大きな出来事でした。食堂は一杯で、撮影所にいた重要なスターのほぼ全員が参加していました、しかし、ロシア選手達は、明らかにただの一人にも気づくことがなく、あまり感動をしていない様子でした。すると突然選手の一人が私を見つけました。彼の英語は限られていたのですが、私のテーブルに素早く移動してきて、手を出して、「荒野の7人、荒野の7人」と言いました。私は微笑んでその若い陸上選手と握手をしました、その彼が後で通訳を介して走り高跳びの世界チャンピオンであり、オリンピックゴールドメダリストである、ワレリー・ブルメルであることを知りました。「荒野の7人」が、モスクワでかつて上映された最も人気のあるアメリカ映画の一つであったことも後に知りました。

私の新しい友人であるワレリーは心を込めて私に輝く金のメダル、ソ連政府が功績を称えて授与した一流競技者メダル、を渡しました。それに驚き、とても感動して彼に感謝の気持ちを伝え渡そうとすると、ブルメルは手で払う仕草をして、メダルはチーム全員の愛情と尊敬の気持ちを表す贈り物であることを示唆しました。

ブルメルと他の選手達が去り始めた時、彼は私の方へやってきて招待をしました：「もし私の国へ来ることがあったら、ぜひ私にモスクワを案内させてください、インツーリストの公式な案内だけでなく、もと違うところを見てほしいので一わかりますよね？」

私は「すぐにでもあなたの国を訪れてみたいです。」と応えました。私は本当にそう思ったのです。一時間のうちに、私の撮影のクリスマス休暇にさらなる休日が増える手続きをし、そしてロシア人通訳の助力のもと米務省から特別なビザを申請する準備を始めたのです。ブルメルの国際的な名声に後押しされたことは間違いなく、ビザはほぼ直ちに届きました、そして一日のうちに私はクリスマスの日ハリウッドを出発し12月26日にモスクワに到着する予定であると知らされたのです。

ワレリーの親切心に応えるため、JFKの肖像が彫られた金メダルがついた立派なキーリングを用意しました。さらに私は新たに鑄造された50セントコインを一巻用意しました。ボリス・セイガル、MGMのとても力のあるプロデューサー・監督・脚本家、が彼の兄弟で、ソ連の代表的な俳優の一人である有名なモスクワ芸術劇場の長期会員である、ダリーン・セイガルへの紹介状をくれました。

私はクリスマスとお正月のころのモスクワで、何を着るべきかも調べました。ガイドブックでミネアポリスの天候とソ連の首都の天候が正に同じである事を知っても驚きはしませんでした。

私は「ビッグショウ」の撮影のためドイツに行ったときに購入した、厚手の黒のベルベットの襟つきの、黒のチェスターコートを探し出しました。私が持っている数少ない父との写真には、彼が生後6ヶ月くらいの私を腕に抱いているのが写っています—それには父が私がこの旅に持って行く予定のコートとほぼ同じモノを着ているのが写っています。私はさらに帽子を新しく2つ購入しました、一つは国際的な政治家に見えるようにとの企みからホンブルグ帽を、そしてもう一つはロシア人のように見えるように暖かな毛皮の帽子です。私はさらにスキーヤー用の防寒下着をも購入しました。

当時ソ連に入国する旅行者は、宿泊、食事、個人用の車、カイドなど全てをまかなうために、インツーリストのクーポンを事前に購入しなければなりませんでした。私が到着したのちにどのホテルに滞在することになるのかは知らされませんでした。クリスマスの日の早朝に、私はアメリカンエアラインに搭乗しロサンゼルス空港を出発、モスクワに直行するエアインディアに乗り換えるはずでした。しかしニューヨークの新たに名付けられたケネディ空港で、エアインディアの欠航を知らされました。私はパリに向かうエアーフランスに振り返られ、ソ連政府のアエロフロートでモスクワに向かいました。

私は12月26日の夕方にモスクワに到着しました。空港で30分ほど待つとやっと口髭と濃いメガネの男性がやってきて、ぎこちない英語で「ロバート・ヴォーン？付いてきたまえ」と言いました。彼は私を黒の長い車まで連れて行き、「私があなをナショナルホテルまで案内します。」と言いました。私が後部座席に乗り込むともう一人黒メガネと小さな口髭の男性が、前のドア

を開け、助手席に座りました。どちらの男性もモスクワまでの一時間、黙ったままでした。

「ナショナルホテル」の一言だけで下ろされたゴリキー通りに到着するまで、私にはなんどもグルグルと廻っているように思えました。私は荷物を中へ引きずり込み（チップを貰うのに熱心なポーターはいません）、そしてロビーに「インツーリスト事務所」という英語でかかれた文字を見ました。カウンターの後ろには小太りの女性が座っていて、微笑むことなく私にパスポート提示を求めました。そしてチラット見たあと、それをしまい混みました。

似たような体格の鍵の係りの女性が、私を直接部屋まで案内して、連れて行きました。

私は事前に、そのホテルの最上級の部屋に対し最高額を支払っていました。私は荷物と、帝政時代の巨大なルームキーとともに一人暗いホールに取り残されました。なんとか照明のスイッチを見つけ、薄暗い部屋へスーツケースを引きずり込みました。私の目が僅かな明かりに慣れてきたとき、私のハリウッド駆け出し時代に泊まったボロホテルのような小さな二つの部屋がそこにありました。

そして、盗聴器が仕掛けられていないか素早く部屋の中を調べました、あるかもしれないと言われていたからです。私には何も見つけられなかったですし、もう真夜中近くになっていたので、ソ連のベッドで眠ることにしました。しかし、眠りに落ちようとしたその瞬間に電話がなりました。それは私のインツーリストの通訳、ユーリ・グリシェンコからでした。私たちは私のソ連での最初の日を始める時間を打ち合わせました。

翌朝私は早く目覚めました、私のユニークな休暇の始まりに本当に興奮していたのです。私は最大の力を込めてなんとか巨大な重いカーテンを開けました、すると私の目の前に、眩しい朝の光の中に色とりどりに塗られた玉ねぎ型のドームを持つ聖ワシリー聖堂を背景に、赤の広場があり、私の眼下にはレーニンのお墓の角がありました。私はついにスタニスラヴィスキ故郷へ来たのです。

私は急いで会うと約束した人たちとの日取りをきめるために電話をしました。ユーリは時間通りに車でやって来ました。彼の英語は完璧で、とても暖かく親しげでした。私たちは直ぐに出発しました。（後に、70年代初期に、彼はインツォーリストの長官になりました。）

殆どの間もなく、私たちはゴーリキー公園で水着を着ているグループに出会いました。彼らは氷に池に穴を開け、泳ぎ回っていました。彼らは私に気づいたようで、私の方へやって来ました。私はユーリに、私がアメリカの新テレビ番組を丁度撮影したところで、私はジェームズ・ボンドと似たような秘密諜報員を演じていると説明しました。私の新しい友人たちがそれを聞いた時、それぞれが私に、「ゼロ・ゼロ・ボンドスキ・マン」微笑みながら、恥ずかしそうに手を差し出しました。

そのグループのリーダーと思われる大きな男性が少し英語を話しました。私は冗談めかして、彼らが水着を来ているのに、私がこんな格好をしていて恥ずかしいと言いました。（私のその日の朝はスキーマー用の下着からヴェルベットの襟のついたチェスターコート、そして毛皮帽、と完全なる冬用の服装に身を包んでいたのです。）そして私はさらに、「アメリカにも貴方たちのようなグループがいます。彼らは北極グマクラブと呼ばれています、と加えました。その名前は大きな笑いをもたらしめました、なぜなら氷に水の中で泳ぐのを楽しむ北極の動物とモスクワの人たちの繋がりをすぐに理解したからです。

ユーリが車を進めると言ったときに、私は JFK の 50 セントコインを取り出しその水泳クラブのリーダーにあげました。彼の反応を見たとき、私はすぐに何百ものコインを持って来なかったことを残念に思いました。彼は手のひらでコインを持ち、感情を込めて和足を抱きしめました。

「ああ、ケネディ。。。ケネディ」彼はため息をつきました、「私たちがそのニュースを聞いたときどんなに心を痛めたことか。」彼は私を見て、こう加えました。「我々の間に存在するかもしれない唯一のものは、冷たい水であって冷戦ではないと願っているよ。」

私は車に戻り、辛うじて涙を止めることができました。アエロフロート機内でのサービスの悪さや、空港やホテルでの無礼な歓迎で抱いていた不快感は全て、一人の平凡なロシア人男性が私に、彼の国のアメリカ人ゲストに、示してくれた彼の友情表現の力により消え去りました。

私の滞在を通して、人々は私の服装からアメリカ人だと判断すると（私はロシアの毛皮帽はすでにかぶってなかったのですが）、私に熱心に挨拶をしてくれました。最初に私を引き止めて話をしてくれた中年の男性の言葉が全てを語っています：「私は英語が上手くないのですが。。。あなたがたの子供、私たちの子供が平和に成長することを願っています。」

一日目を一緒に過ごしたことで、私はユーリが私のガイドに選ばれたのは、彼が劇場に興味があることによるのだと分かりました。彼は私の滞在中に見ることのできる演劇やイベントを選ぶのを手伝ってくれました。ユーリは私の日中のガイドとしてのみ雇われていたのですが、私は彼をボリショイバレーと一緒に誘いました。彼はとても興奮して喜び、結局私はその後全ての夜に彼を招待することにしました、それがショーであったり、私が招かれた個人的な御

宅であっても、です。彼はそれらの全てのショーに払える力がなかったことだけでなく、さらに重要であったのは、本当であれば、彼が知り合うことなどなかつたかもしれない有名な芸術家や選手たちに会う機会を得たと言うことです。そしてもちろん、私はこのような能力のある通訳が私の行くところどこにでも居てくれるという恩恵に預かったのです。

二日目の夜、私たちはモスクワ芸術劇場、アメリカで言えばニューヨークのアクターズ・スタジオのようなものなのですが、その「シラノ」公演を観ました。公演の後、私立ちはオレグ・タバコフと奥さんの自宅で招かれました、その公演のキャストメンバーが彼らの結婚5周年のお祝いをちよつどしたところでした。そこにはまだ食べ物が残っていて、彼らはユーリと私を招待しただけでなく、その公演のスター、とても小さな鼻のシラノを見事に演じたミハエル・コサコフも招待していたのです。私たちは彼らの小さなアパートの外のパルコニーのグリルで焼かれた素晴らしい夕食と素敵なグルジアワインを楽しみました。彼らはことのほか親切で親しげな人たちで、私の旅のお土産にと彼らの家にあるものを私に次々とくれました。ほぼ5時間にもわたり、もう真夜中を過ぎようという時まで、劇場のこと、政治のことをタブーや制約なしに語り合いました。彼らは特にアーサー・ミラーの演劇セイラムの魔女裁判を扱った「The Crucible」(るつぼ)とそれに平行する第二次世界大戦後のアメリカにおけるマッカーサーシズム、赤狩りに興味を示しました。私たちは其々の国の相対的な強さと弱さについて、率直に友愛の精神を持って議論しあいました。

真夜中が訪れそして過ぎて行きました。今や雪が激しく降っていて、ユーリは自分たちの車を見つけれないでいました。ミハエル・コサコフもこの雪に覆われた道で私たちに加わり、そして突然彼のあの力強い声で歌い始めまし

た。ユーリも直ぐにその歌に加わりました。私は彼らの歌っているロシア語の歌の一言も理解できなかったので、最初に私の頭に思い浮かんだ歌、「アメリカ空軍の歌」：「さあ行こう青空の彼方へ、太陽へ向かって高く昇れ」と歌いだしました。その夜タバコフの近所の人たちはなんと思っていたであろうか。

翌日、私はモスクワ芸術劇場を訪れました。私は畏敬の念をもって、この神聖なる建物、私が40年代半ばから研究し、色々と読み続けてきた、この建物に入りました。

ダリーン・サガルが私に授業を見学しパントマイムセッションを見るという魔法の合鍵を与えてくれました。若い俳優たちの演技の明晰さは通訳のなものをも必要としないものでした。それらはほとんど睡眠作用の最中のうっとり魅了されるものでした。

次の日、ワレリー・ブルメルと私はソ連全土に実況中継される記者会見を開きました。私はブルメルに金のキーリングと JFK の大メダルを贈りました。その中継に立ち会った劇場の観客は有頂天になり、私に繰り返しそのメダルがどんな種類の政府のメダルなのかを尋ねました。それを私がアメリカの宝石店に入り、カウンター越しに手に入れたメダルだなどとは、とても言えませんでした。

私の訪問のハイライトはモスフィルムスタジオでの彼らの最新作、あのロシアの抜きん出たコメディアン、スモロノフスキイ主演による「ハムレット」の特別上映でした。私は崇拜するシェークスピアの作品を長年にわたり研究していたので、ロシア語で演じられても全く問題なくついて行くことが出来ました。スモロノフスキイは素晴らしい演技で誠実に演じました、ただしシェークスピアの台本に基づいたユーモアが適切どころ以外は。

私が新年を迎える直前にアメリカに戻ったとき、私はABCネットワークの「レクランTVショー」に、ニューヨークからのライブで私のソ連訪問について話すのに、招かれました。ネットワークは視聴者からの、何故明らかに共産主義の悪魔に洗脳された馬鹿な俳優に、放送時間を割いたのかという、抗議の手紙を沢山受け取りました。その反応はやがて私がベトナム戦争について語りだした時にやって来る物に対してのまだ穏やかな前触れでした。

ハリウッドは瞬時のヒット、即座のスターダムの地—相応しい顔、相応しい才能そしてほんの少しの運のある人が突然、TVのショーあるいは映画と言うある特定の「財産」乗っかって、名声、賛辞、富の頂点まで上り詰めている自分に気づくのです。しかし眩い光とともに上りつめるものは、また暗闇のなかに落ちるのも早いのです、あの運命の昔からサガ—食欲のせいだ。

そしてこれが「0011 ナポレオン・ソロ」の突然の終焉に起きたことです。

私たちはTVや映画を「創造的」な産業としての話をしたいのですが、ある意味では「創造的以外の何ものにもなりうるのです：ハリウッドの大御所の奥底にある直感は、しばしばそのように見えるのですが、ほかの誰かが成功したものを真似ることなのです。UNCLE それ自身も、ジェームズ・ボンド映画のTV版を代表すると言う、その直感の賜物でした。

UNCLE が初めて登場した時には、それが唯一のアメリカのスパイシリーズでした：2年のうちに、それは沢山あるうちのひとつとなりました。この場合、他の多くがそうであるように、「創造的」とはブームの頂きに乗ることを意味するのです。私たちはこの流行に一階から乗ることが出来て、とても幸いでした。

しかし、1966年までにはスパイブームはすでに陰りを見せていました。ネットワークの責任者たちは次のブームを探し始めました。彼らは昔のコミックの登場人物に基づいた新番組が思いもよらないヒットとなったのを見て、新しいブームを見つけたと信じ込んだのです。

「バットマン」の予期せぬ一夜の成功、ABCの1966年初めのシーズン半ば差し替え番組で、大衆文化における新しく皮肉な展開によるTV侵略が始まりました。プロデューサーのウィリアム・ドジエと作家のロレンズ・サンプル・ジュニアのアドバイスの下、「バットマン」は本質的には1950年代60年代のふざけた風刺をベースにした、陳腐なスーパーヒーローを真剣に使用しました。タイトルの主役のアダム・ウェストは、名誉、勇気、愛国心を唱えるド派手なセリフを与えられ；彼の助手ロビン（バート・ウォードが演じた）は「聖なる原子炉だ、バットマン」のような印象的な（馬鹿げた）叫び声上げていたのです。殴り合いは漫画のふきだしのスタイルで「バシッ！」「バーン！」「バシヤ！」のように画面に描かれて強調されました。そして大げさなナレーター（プロデューサー、ドジエ自身の声による）がハラハラしたエピソードの最後を、次回はもっとスリルがあるのでファンに必ず見るように駆り立てて終わるので：「同じバットータイム、同じバットーチャンネル！」と言って。

全ては断固とした伝統的なコミックのヒロイズムにのっとりった頓馬なテーマでした—そして60年代半ばの英雄的資質を欠いた世相において、それは巨大ヒットとなったのです。

この急速な視聴者の反応を捉えて、NBCはU.N.C.L.E.を主たる武器として使いこの流行に乗じようとしていました。そうしてNBCの彼の世とMGMの伝説的な撮影所において、U.N.C.L.E.をボンド風の愉快的な冒険に元づいた以前のその成功を放棄して、ある種のコメディに転換するという決定がなされたのです。新た

な業界用語は「大フザケ」で、突然ハリウッドのタビネズミたちは新たな方向へ行進し始めたのでした。

サム・ロルフがアンクルの初年度の制作プロデューサーで、番組に成功には彼の構想が反映していただきました。彼は全てに目を光らせ、第一シーズンの沢山の脚本をも書きました。そして彼は番組を去ったのです、伝えられたところによると、彼が正しく評価されていないことそしてその対価も過小評価されていたことが不満であったようです。デヴィッド・ヴィクターという新しいプロデューサーが加わりました、その後の番組を二年半に亘り監督する何人かの一人として。

当然ヴィクターは彼の足跡を残したかったので、番組の特徴的な性格が変わり始めました。不幸なことに、ヴィクターは「アンクル」の、基本的には真剣な冒険話に時にひねりの利いたユーモアを加えるという、本質を理解していませんでした。ヴィクターはこの番組をスパイジャンルの「パロディ」とみなしている幾つかの雑誌記事を読み、そして「バットマン」の成功をさらなる拍車にして、その考えで行くことにしたのです。ヴィクターはユーモアを強調することを決心し、そして番組はほぼ純粋なコメディへと転換されたのです。

人気の衰えは第二シーズン(1965-66)の新しい脚本とともに始まりました。控えめだったユーモアは徐々に茶番劇に変えられ、番組はついにはまったく大げさな「バットマンスタイル」のものになってしまいました。もし、ユーモアを取り入れる試みのほとんどが「馬鹿馬鹿しい」ではなく「滑稽」のほうであれば、この考えもそんなに悪くはなかったかもしれません。アイスキャンディ型手榴弾、ゴルフカートの機関銃、りんご爆弾、スカンク臭に満たされた爆弾に乗ったイリヤ、そしてゴリラの衣装を着た奴と踊るナポレオン。

それでもなお、私たちが第一シーズンに作り上げた勢いでまだ沈まずに済んでいました。

第二シーズンの「アンクル」は、「ローレンス・ウェルクショー」、「ウォルト・ディズニーの素敵カラーの世界」、「パパ大好き」、そして「エド・サリバンショー」といったすでにヒット番組として確立した番組を打ち負かす結果となりました。ショービジネスのバイブル、「バラエティ」はそれを「上手く成功しており当然の結果である」と言い、「もしそのテンポと興奮が維持されれば、メトロゴールドウインはトップ10を獲得するであろう。」と予測したのです。

番組の人気はいくつかの批評家の絶賛をもたらしました。ハリウッド外国記者クラブは世界で一番好まれているTV番組として金メダルを「アンクル」に与えました。私は「フォトプレイ」のアメリカで最も人気のあるスター部門でゴールドメダルを受賞し、以前の受賞者であるジョン・ウェインからメダルを授けられました。

「アンクル」のヒットが継続した勢いで、NBCは1966年にスピンオフ番組を作りました。それが、ステファニー・パワーズが主演の「アンクルから来た女」、でした。（ステファニーは最近私の友人で、私の「アンクル」への踏み台となったあの番組、ノーマン・フェルトンの「ルーテナント」のスターだった、ゲーリー・ロックウッドと結婚し離婚しました。）彼女がボブ・ワグナーと一緒に「ハート トゥ ハート」に出演した時に何百万ものアメリカ人が彼女を見に来たように、ステファニーは美しく魅力的な、才能ある女優さんでした。しかし、「アンクルから来た女」は彼女がその才能を発揮する手段ではなかったのです。その番組は第一シーズンの終わりに、ネットワーク

のゴールデンアワー60番組中57位となり、キャンセルとなりました。それは元々の番組には縁起の悪いこととなったのです。

「アंकル」の第3シーズンは脚本がもっとひどくなりました。それは実際のところ、ディビッドと私が銃なしでカップケーキを車に向かって投げつけるほどにまで達しました—それほどなくらいに馬鹿馬鹿しくなったのです。制作責任者のノーマン・フェルトン、プロデューサーのディビッド・ヴィクター、そしてボリス・イングスター全員が、もしこの「アंकル」の現代的/大げさな演出が続いたなら、ヒット番組がキャンセルと運命づけられるであろうと意見が一致しました。

人々が「こんな訳には行かない」と言うようなことを言うときには、大体上手くは行かないものです。「アंकル」の第四シーズンは16話が撮影された後キャンセルを余儀なくされました。「地球を盗む男」（パート1、2）が1968年1月8日と15日に放送されました。それがこの「アंकル」ヒット作品の終焉を綴りました—1983年にディビッドと私が出演したぱっとしない再結成番組「帰って来たナポレオン・ソロ」：15年後の事件は含みません。

皮肉なことに、「アंकル」がキャンセルされたとき、NBCのその週の枠は完全なる現代風のバカ馬鹿しいお笑い番組によって埋められ、即座のヒットとなりました。その番組は二人の有名なコメディアン、ダン・ローワンとディック・マーティンによる、本格的な、疑いのない、成熟したおかしな寸劇、ユーモアのあるトークで溢れていました。その名前は「ラフ・イン」（皮肉度を増すために、その最初の一話はほかでもないレオ・G・キャロルの特別出演を、ゴールドディー・ホーンとルース・バッジのような人たちがいるダンスフロ

アで、ペン通信器に緊迫して「オープンチャンネルD！ ソロ君！私はスラッシュ本部を見つけたようだ！」と語りかけている場面を入れていました。

40年たってアンクルがどのように第一シーズンの間に殆ど大失敗から国際的なヒットになり、そして18ヶ月の間に最終的にキャンセルになったのかをじっくり考えてみるに、このような考えを加えたいと思います。

まず第一に、最初の2.3話だけで考えて見た場合、アンクルの生き残りはおそらく今のネットワーク率いる視聴率という超強力な圧力下ではありえなかったであろうと言えます。昔の60年代半ばでは、アンクルのような可能性のある番組はまだ少なくとも、視聴者を見つけるまでの時間が与えられていたのです。今日であれば、11月までには放送中止になり、番組の宣伝をするチャンスもファンによって築かれた口コミの力で伝わるチャンスもなかったでしょう。我々の産業に於けるこの変化は最善であるとは思えません。ネットワークのこの短絡的な考え方により、どれだけ多くの良い番組が時期尚早に消えていったことでしょうか？

第二に、アンクルの第二、第三シーズンの間に何かが間違っていると感じた私たちの誰かが、番組を元のトラックに戻すように私たちの強力な力を使うことが出来たらよかったのにとと思います。 デイビッド・マッカラムと私は、あれら茶番に満ちた台本がアンクルを人気番組にしたものとはかけ離れていることに間違いなく気づいていました。しかし、私たちはまだ若い俳優で、自分たちの最初の大きな成功を楽しむことに感動していました、そして、おそらく、撮影を呼び込む制作側の大物たちに多少恐れを抱いていたのかもしれませんが。この人たちはTVネットワークの世界で何年も身を置いている人たちだ—彼らはもちろん何をやっているのかを知っているはずだ、と。私たちは固

く口を閉じ、これら惨めで、役たらずの台本に、命を吹き込もうと懸命に努力したのです。

今日、もちろん、ショービジネス界で戦ってきた口うるさい老兵の二人として、ディビッドと私は、責任者である彼らがやっていることが当然であると思う以上のことを知っています。今なら。我々が制作するのに関わった貴重な作品がTVで失敗するのを見る前に、もっと大きな声で叫ぶことができるであろうと思いたいものです。しかし、それはあと知恵、そしてそれはいつも良く見えるものなのです。

もちろん、私のアंकルの思い出が主に悲しいものであることを、暗に意味していると思うのは愚かなことです。それとは全く反対です：私がハリウッドの有名人の一番上にいた期間は比較的短い期間であったかもしれませんが、それは莫大に楽しく価値のあるものでした。

それは私をあまり豪華ではないけれども、同じくらい有意義な40年をTV、映画、そして舞台上、多様な主役な性格的な役を演じるように仕立ててくれたのです。ナポレオン・ソロという偶像的な役は、数え切れないほどのプロデューサー、監督、配役担当重役が、私に対し強力でドアを開けさせる役割を果たすと同時に私の冒険の数々についてきてくれる忠実なファンの土台を作ってくれたのです。

そして何よりも、私にはこの上なく優れた芸術家で紳士である、レオ・G・キャロルとディビッド・マッカラムという二人と知り合い一緒に仕事をした素晴らしい思い出があります。レオは1972年、癌との戦いの後に亡くなりました、アंकル放送終了のちょうど4年後のことでした。ディビッドは幸せなことに、健康で活躍中で、今はCBSの人気ヒットシリーズ「NCIS」で、ド

ナルド・“ダッキー”・マラド医師として出演しています。この第二シーズンのエピソードで、ジェスロ・ギブスとケイト・トッドの間での会話に、私は楽しく笑ってしまいました。

トッド： ギブス、ダッキーが若かった時はどんな感じだったのだろう？

ギブス： イリヤ・クリヤキン

「おい！」私はスクリーンの俳優たちに向かって叫びたくなりました—「私がそうだった時を知っているよ！」と。

俳優にとって、人気番組や舞台の終わりは複雑な心境をもたらします。もちろん定期的な収入、興味を示されること、やりがいのある仕事を失うことは嫌でしょう。しかし、常に要求の高い毎日の仕事がなくなるということは、他の仕事へ参加する時間と機会をも開いてくれるのです。私の「ナポレオン・ソロ」の終了後の最初の大きな仕事はスティーブ・マックィーンの刑事ドラマ「ブリット」でした。

スティーブ・マックィーンと私は「荒野の7人」で一緒に仕事をした後も友人でいました。彼の奥さんのニール・アダムズ・マックィーンにはその映画撮影中に会い、親しくなりました。彼と1972年に離婚した後も、ずっと友人で

いました。今日、それから半世紀近くになりますが、ニーリーと私と妻のリンダは今もととても近い友人でいます。

スティーブはおりにふれ、「寄っても良いかい」と電話をかけてきました。私たちは何か特別なことをするわけではありませんでした—ほとんどはサンセット通りを車で行ったり来たりするだけでした。大抵あの有名な「ウィスキーアゴーゴークラブ」(彼の友人のエルマー・バレンタインが経営していた)に立ち寄り、ビールを少し飲んで、私やスティーブに色目を使う若い女の子を眺めていました。そういう彼女たちとは話をすることは全くありませんでしたが、私はたまにその後のランデブーに一人くらい選ぶことはありました。でも私の知る限り、スティーブは決してそれはしていません。

私の何がスティーブにとって良かったのかは未だにわかりません。私は彼が一番情熱を持っていた車や、バイク、レースやほかの機械についても何一つ知らなかったのです。(彼のファンが知っているように、スティーブは熱心なレーシングカーやバイクの収集家で自分でも映画で車のスタントを沢山やっているのです。) 私はスティーブの他の興味についても、共有することはありませんでした、薬を経験することです。1954年の秋に、私は薬による恐怖を経験していましたし、スティーブはそれをジミー・コバーンから聞いて知っていました、ですから私たちが一緒に吸うことはなかったのです。戦争や市民権など政治的な事がらを一緒に話すことなどありませんでした。実際のところ、彼はハリウッドの外の世界で起きていることを知ることにも、関心を示すことも決してなかったようでした。ですから、本当に私たちに共通のものは何もなかったのです、ただ一つ私たちの職業以外には。

それでも私はスティーブと一緒に居ることがとても楽しく、そして彼も私のことを明らかに気に入っていました—私がしょっちゅう彼の野望や永遠に増加し続ける偏執症をからかうという事実があっても、です。

そして私のスティーブとの友情は時として、忘れられない思いでへと、導くのです。ある時、スティーブとニールがニコルズキャニオンのソーラドライブに住んでいるとき、私はスティーブからハンセンデンと言うところのレースと一緒に参加しないかと誘われました。「いいよ」と私は答えました。翌日、スティーブは赤のD型ジャガーコンバーティブル（とても高価な車）を運転して迎えにきました。彼はあきらかに苛立っていました。私が何故かと尋ねると、彼はそのレースに出たかったのに、それが出来ない—今度の映画制作を補償している保険会社が強く反対したのだと、説明しました。スティーブは失望し、イライラしていました。

そのレースが終わると、スティーブは更に一層イラついていました。私たちは彼のジャガーに飛び乗り、危険なほどのスピードで走りだし、全速力で近く的高速道路に入りました。次の10分間はまるで映画のカーチェイスのようでした、ただしLAPD（高速警備隊）はどこにも見えませんでした。（本当に来て欲しいと願っているときには一体彼らはどこにいらっしゃるのでしょうか？）私はスピードメーターを見る勇気がありませんでしたが、こう言うておきましょう、激しく雨が降り出していたにも関わらず、スティーブも私も全く濡れなかった、と。

私たちがソーラドライブの駐車場にもどると、ニールが待っていました。彼女は私の顔を見るや大声で笑い出しました。彼女はすぐにカティーサークを4本指分ついでくれて、それでなんとか、私のガンガンと鳴り響いていた神経がほぼもとにもどりました。

1968年までにはスティーブのキャリアは安定して上昇続けました。「荒野の7人」のあと、彼は「大脱走」（1963）に主演、そして「砲艦サンパブロ」（1966）では初めて（そして唯一の）アカデミー賞にノミネートされました。これらの批評と興行成績に後押しされて、スティーブは彼自身の会社ソーラプロダクション（ソーラドライブから名前を取った）とワーナーブラザーズで7本の映画を制作する契約をしました。「ブリット」がそのまず1本目となる映画でした。

この映画企画の初期の段階で、スティーブは私に脚本を送ってきました、私はその映画の鍵となる役のうちの一つを受けてくれるだろうと願いからです。それには契約金の提案も添えられており、基本的には私の期待する線のかんりの金額ではありませんでした。

ロバート・L・フィッシュの小説に基づいた、犯罪組織の陰謀とサンフランシスコの政治的な大駆け引きについてかかれた脚本でした。残念なことに、私が読んだときには、人物のとり違い、うそくさい手がかり、裏切りなどが、ごちゃごちゃになっており、とても混乱し、コピーの途中で何ページが飛んでしまったのではないかと思っただけでした。

スティーブは数日後に電話してきて、「どう思う？」と尋ねました。

「これが君の会社が作る最初の作品だよね？僕には良くわからない。2回読んでも話が見えないんだよ」と答えました。

「ん。。。それは問題だ、どうしたら良い？」スティーブが言いました。

「実のところ、提案があるんだ。私はすごく良い脚本の先生（スクリプトドクター）を知っているんだ、たくさんの映画の不安なところを直してきているイギリス人の女性をね。相談してみたらどう？」

スティーブは私の助言に従いました。彼はそのスクリプトドクターに電話をし、脚本を分析するように頼みました。彼女は実践的な提案の長いリストを削除するシーン、加えるシーン、登場人物をもっと絞り、強調すべき非常に重要な詳細などなど。

そして脚本は修正されて、新しいものが私のところへ送られてきました、前のよりも高い契約金の提案も添えられてです。しかしながら、私がそれを読むと、ドクターの提案の10%ほどが取り入れられたにすぎないのに気がつきました。ストーリーは実質的にさらにややこしくなっていました。私はスティーブに電話し、そのように伝えました。

落胆して、彼は脚本チームにお繰り返し、そしてまた送り返しました。毎回いくつかの変更が加えられ、その都度スティーブは私に新たな契約金の提示を付けて、脚本を送ってきました、送られて来るたびに前より高い提示金額でした。

ついには、私が今まで映画でもらった出演料よりも高額な契約金の提案がついた脚本が送られてきました—実際のところ、私の初6ヶ画映画出演料記念日でした。そして脚本は数か月前に読んだ最初のものとはあまり違っていませんでしたが、スティーブが電話をしてきた今回、私は彼に告げたのです、「あのさあ、この映画はドンドンと僕に良さそうに見え始めたよ！」。私たちは二人で笑いました。

私はもつれ合った筋書きは批評家や観客が解き明かすのに任せようと思いましたが。どうやらそうなったようで、「ブリット」は興行的に大成功を収め、今や1960年代を代表する映画とみなされ、最近ワシントンD.C.のスミソニアン博物館の映画記録保存所に保存されるべきものとして選ばれました。

「ブリット」はイギリス人のピーター・イエーツが監督し、とても美しいジャクリン・ビセットがマックィーンの「恋人」役として出演しました。もし、あなたがDVDでこの映画を観ることがあったら、映画のはじめのほうのタクシーのシーンでよく運転手を見てください：2詞3詞しか話していませんが、彼の映画での最初の役のロバート・デュバルに気づくことでしょう。

私の役はウォルター・チャルマースという、犯罪防止キャンペーンを展開してその世間の注目を集め、さらなる名誉と権力を手に入れようとする野心家で如才のない政治家でした。ロバート・F・ケネディ — 聡明で、カリスマ性があり、断固とした — の無節操な形を考えてくれれば、私の演じた役のイメージがつかめると思います。それは私の「ナポレオン・ソロ」ファンからすればおおよそ認めがたい役ではあったと思いますが、1950年代後半から1960年代前半まで私が多くのTVシリーズにゲスト出演し演じた役柄のうちの一つにとっても似通ったものでした。ロバート・レリー、「荒野の7人」の助監督で、「ブリット」のプロデューサーである彼はこのように言っています。「ヴォーンがああ役をやるときは他の誰よりも上手にやる、彼を見るや否や顔をひっ叩きたくなるよ。そしてそれがまさに私たちが求めていた質なんだよ。」と。

常に神経質なスティーブ・マックィーン — 今やスターであるだけでなく全プロジェクトの責任者である — 彼と一緒に仕事をするには、時には細やかに話し合いの必要があるということに気づきました。私がセットに登場した最初

の日、私はスタッフにファイベータカップクラブ（注：成績優秀な大学生・卒業生から成る米国最古で最も有名なギリシャ文字のクラブ）のキーを3つ揃いスーツのベストにつけるように頼みました。それが私の演じる役柄、教養が高くうぬぼれが強い人物、にピッタリのアクセサリーだと考え出してのことです。しかし、それをつけている私を見たスティーブはイエーツ監督の所へ行き文句を言いました。「何故ヴォーンはあんなのを付けているんだ？あれでは皆が（華麗なる賭け）を連想するだろう」

その映画はスティーブの最新作だったのですが、それで、彼は実業家そして泥棒という役にミスキャストされていたのです。1999年にピアース・ブロズナム主演でリメイクされましたが、映画ファンの人達にはそのサウンドトラックで記憶に残っていると思います（“風のささやき”は1968年のオスカーで作曲賞を受賞しました）。マッキーンとフェイ・ダナウェイとのお色気ある駆け引きが描かれ（数十年後”オースティン・パワーズ“でパロディー化された）、二人の55秒もの長いキスシーンは映画史上もっとも長いものの一つです。ともかく、その映画でスティーブもファイベータカップクラブのピンをつけていたのです、百万人に一人の映画ファンくらいしかその詳細はおぼえていないでしょうけれど。

ピーターが私にスティーブが私の選択に不満であると言ったので、「じゃあ、彼に直接話合いに来させてください。」と答えました。

そうして私たちは話し合いをしました。スティーブが「華麗なる賭け」との連想を気にしていることを言い出したとき、私は業界の古い言い伝えの一行を持ち出していいました。

「もし、本当に観客がそういう関連付けをすると本気で考えているのなら、その映画がちゃんと描かれていないと、いうことだ。」と。それが正しくはどういうことを意味するのかは私も本当は知りませんでしたが、そうすることで、私の衣装の選択にがたがた言うよりも脚本家に責任を負わせることにしたのです。一番大事な事は、スティーブがそれに負けて、私にそのキーをつけることを許可ことです。

スティーブと私は私の演技のほかのこまかなところも議論しました、言葉の選択にいたるまで。 議会の公聴会での重要な証人を保護することに失敗したマックイーン演じるブリット刑事を、チャルマースが見下して激しく非難するシーンがあります。チャルマースは冷笑を浮かべて、「責任逃れをしようとするなよ。君たちの口調でいうなら、君はしくじったんだよ」とブリットに言います。その「口調」 ”parlance” という言葉はスティーブがもともと脚本にあった言葉が観客にとって「きつすぎる」と感じ、議論したのちに妥協した言葉です。もともとの言葉がなんであったのかは忘れてしまいましたが、私がマックイーンが納得する「parlance」という言葉を見つけるまで、「patois」（訛り）、「nomenclature」（術語体系）のような言葉などを提案していたのを覚えていています。

「ブリット」は結果として映画史上において、画期的なものとなりました。その横柄で上部からの圧力に怒る格好良い若い刑事は、その何年も後もイーストウッドの「ダーティハリー」のような役のモデルとなりました。

サンフランシスコの街並みでのカーチェイスは映画史上最も偉大な追跡シーンとして頻繁に引き合いに出されます。実際、2005年には5500人のイギリス映画ファンによる投票で歴史上No.1カーチェイスに選ばれました。

9分42秒にわたるそのシーンは撮影に3週間要し、時にその最高速度は時速180kmまでに達しました。マックイーンが彼自身で運転をし、またスタントマンのバッド・エルキンスが最も危険な動きの大半をこなしました。

「ブリット」は私がスティーブ・マックイーンと一緒にした仕事の中で最も関りを深く持つことのできた作品です。後に私たちは「タワリングインフェルノ」で共演しましたが、私たちの役柄上、あの映画ではあまり互いに交わることはありませんでした。しかしながら、私たちは彼が肺がんでなくなる1980年までずっと友人でいました。(スティーブは一日に2・3箱もタバコをすっていたことや何年も毎日マリファナを吸っていた事実を無視して、19歳のとき戦艦のアスベストをのろいました。)

私は最後の最後、通常の治療ではどうにもならなかった段階でもなんとか彼を助けようと思いました。私の友人にイギリス女王のヘアドレッサーをしているレニーの料理人をしている友人がいました、彼女は治癒力があると言われる機械を開発していました。それは電極を患者の腕に取り付け、昏睡状態を作り出し、最悪の症状からある種の解放をもたらすようでした。マックイーンが死にかけているときに、私はスタン・ケイメン――一時はスティーブと私の代理人であった――に電話し、「僕の知っているこの女性はローレンス・オリビエや英国王室の人達も彼女の機械で治療してある程度成功しているんだよ。スティーブは興味ないだろうか？」と尋ねました。しかし、遅すぎました――数日以内に、スティーブは行ってしまいました。

マックイーンとのいくつかの最後の思い出：

60年代初期、私たちが車で良く出かけていたころ、スティーブは私に「どこでヘアカットをしてる？」と尋ねたことがあります。「大抵は映画セットで

だよ」と応えると、「俺、セブリンっていう奴がフェアファックスアベニューでちょうど店を開いたのを見つけたんだ。男性のヘアスタイリングをする奴だよ。一度行ってやらせてみたら。」と言うのです。そのお勧めにしたがい、60年代の残りの年はジェイ・セブリンが私の床屋さん（床屋という言葉は彼は絶対に使いませんでした）でした。色んな機会に、スティーブは彼の友人たちとのパーティーに招待してくれました。しかし特にこれと言った理由もなく、私は断っていました。

最後に私が彼を見たのは1969年夏です。彼は、またパーティーに招待をしてくれましたが、私は再び断りました。当時の会場はシエロドライブで、チャールズ・マンソンの信者がジェイ、ロマン・ポランスキーの妊娠していた妻のシャロン・テートや他の人たちを殺害したところでした。大虐殺のあとにスティーブは自分の名前がマンソンの殺害者リストに載っていたのを知り、それからいつでも可能な限り銃を携行するようになりました。

スティーブは3度結婚しましたが、私は彼の人生とキャリアにおける重要な役割を果たしたのは最初の妻ニールであったと思います。彼女の援助と聡明さがなかったなら、彼の急速な成功はまだまだゆっくりしたものであっただろうと思います。彼女はスティーブの女性への魅力を理解していて、それが最初の映画ではちゃんと出ていなかったのを知っていたのです。（彼の最初の主演映画は低予算のホラー”The Blob” 1958年、でスティーブの私”Teenage Cave Man”に匹敵するような作品です。） フランク・シナトラが彼を「戦雲」（1959）に配役するころには、彼の有名な画面上での人格が現れはじめ、1960年の「荒野の7人」でついに輝きを放つことになるのです。3年に及ぶ人気番組「拳銃無宿」での賞金稼ぎジョシュ・ランデル役で

彼は世界的に有名になりました。ニールは彼がこのようなキャリアアップのために効果的に導いたのです。

1963年2月にニールとスティーブは彼らの「城」を購入しました。そう呼ぶにふさわしいくらいのブレントウッドのオークモントドライブにある壮観な石の建物でした。3エーカーの土地に18部屋があり、サンタモニカの街並みと太平洋を見下ろして立っていました。

1964年8月に彼らは、その城で最初のハリウッドスタイルのパーティーを開きました。私もショウビジネスの他の有名人とともに、招かれました：ジム・ガーナーズ―マッキーンの隣人、ジミー・コバーン、ジョージ・ハミルトン、カーク・ダグラス、ショロン・テート、キャロル・ベーカー、ジャネット・リー、ベン・ギャザラと奥さんのジャニス・ルール、ジーナ・ローランドとご主人、ジョン・カッサヴィート、エバ・マリー・セイント、クロリス・リーチマンとご主人、ジョージ・イングランドなどなど沢山の人達です。ナタリー・ウッドが、私が今までに受けた中で2番目に大きい抱擁で迎えてくれました。（一番？それは10年後に20世紀フォックスでドーリー・パートンに会ったときのもの、彼女に抱きつかれたら、それは本当にすごく抱擁されるんです。）

それは想像がつくように、とても豪華絢爛なパーティーでした。ハリウッドでもっとも重要な二つの象徴としてのスティーブとニールの登場を誇示し、確固たるものにしたものでした。真夜中も近いころ、私はサンタモニカの点滅する街の灯りと海を見渡せるテラスに立っていました。スティーブがやってきて少し話をしました、そしてちょっと長い沈黙がありました、スティーブと話しているといつものことなのですが。

ついに私が口を開きました「君が50年代ニューヨークにいたころ、水しか出ないアパートに住み、ニールを君のバイクに乗せて口説いていたころ、こんな風になることを (end up) 想像したかい？」

また沈黙の後、私の方を見ることなく、スティーブはこう答えました。

「なんで、僕が今こうして落ち着いてしまう (end up) と思うんだい？」

私はちょっと含み笑いをし、そして、また長い沈黙の後、スティーブはゆっくりと歩み去りました。彼はとても特別な友人でした。そして、私はいつも彼独特の人生への見解を失い寂しく思っています。

一方、騒々しい1960年代が展開されるつれ、私の日常生活もその浮沈あり、妙な出来事がたまにありながら続いていきました。

それは1967年10月13日、金曜日（その日は警告されるべき日付でした）のことで、私の人生のなかでの一段と異様な経験の一つが起きました—有名人の生活の暗い側面を物語る例と言えるでしょう。

その夜、私は私の秘書のシャロン・ミラーと彼女の女友達二人、ダイアナ・メイトランド、メアリー-ディビッド・ブレイムソンと一週間の仕事の終わりを祝うために、西ロサンゼルスのパコ大通りにあるマタドールと呼ばれるスペインレストランに出かけました。私はそこを何でも訪れ、そのパエリア、スペインでは貧しい人々の料理とみなされているのですが、それをいつも楽しんでいました。それは通常サフランで香りをつけたお米となんでもそこにあるもの—ソーセージ、チキン、エビ、ホタテ、など何でも一と一緒に料理した

ものです。その時は「アンクル」のキャンセルが発表されるちょうど1ヶ月前でした。

私たちのテーブルのバーに背を向けてダイアナと私:私は壁に一番近い席に座り、ダイアナが私の左に座っていました。メアリー-デイビッドがダイアナの向かい側、シャロンが私の向かいでした。

私たちが席について間もなく、まだ注文もしていない時に、一人の男がテーブルにやってきました。ジョンと呼んでおきましょう。彼は私をボブと呼び、別のテーブルにいる人たちに会いに来てくれないかと頼みました。私は喜んでその人たちに会うが、今到着したばかりで、とても疲れているので、もしよければ、その人たちがこちらへ会いに来てもらえないだろうかと言いました。彼はそれはダメだと言い:彼らはレイカーズ機構の人たちだと言う。そして彼は私に名刺を手渡し、それが彼がレイカーズとの繋がりがあることを証明するのだとは想像しました。(レイカーズバスケットボールチームは元々はミネアポリスのチームで、彼らがそこを拠点にしている時には私は数多くの彼らの試合を見に行っていました。)

私は、帰る時に会いに行きましようと言い、再び拒否しました。ジョンは私の提案に不満そうに戻って行きました。

2・3分後、ブロンドの男性と女性が我々のテーブルにやって来ました。その男性は私にその女性を覚えているかと尋ねました。私は知らないと言いました。彼女は彼女と一行はキングズから来たと言い、私がキングズを知っているかと尋ねました。(彼らはL.A.のホッケーチームです。)私は知らないけれど、2.3のクイーンズであれば知っていると言いました。私の連れの女性たちは笑いましたが、ブロンドの男性とその女性は笑いませんでした。私はその女

性に挨拶をし、彼女は私がホッケーが好きかと尋ねました。私は好きだと答えましたが、それは本当ではありませんでした。そして彼女は女性たちを紹介して欲しいと言い、私はそうしました。その女性はそして「あなたはキングズが誰だか知らないのね？」と言い、私は知らないと答えました。彼女は「あなたが何だか分かる？あなたは無知よ！」と言ってその男性と歩き去りました。

この時には、シャロンとダイアナは化粧室へと席を立っていました。マエアリー-ディビッドソンと私は席に残り、酔ったときの奇矯なファン行動について話をしていると、別の男性がテーブルへやって来ました、前の二人よりももっと酔っ払っていました。彼は、何年か前に JFK が彼にボストンの最優秀スポーツマン賞を授与したようなことを話しました。彼は私がそれに関心してないのだろうと尋ねました。私は困惑しながらも穏やかに「いいえ」と答えました。その男性は「少なくとも俺の顔を見ろよ」と言いました。その時点では、私は「アンクル」撮影中の発泡シーンでの銃声音が私の右耳に集中したことによって起きた耳の損傷の回復途中でした。そのため、私は自分の左耳を彼の顔に近づけていたので、私の顔が彼の方を向いていなかったのです。彼は「俺たちはひどい会話をしてるよな」と言い、私は静かに「そうですね。」と言いました。彼は「俺に居なくなってほしいんだろう？」と言うので、私は静かに、しかし強く「そうですね。」と答え、彼は居なくなりました。

その約5分後、ちょうど私たちの食事が用意され始めた時に、ジョンがまた戻って来ました。私はその時シャロンのメガネをかけていました。ジョンは私の左のダイアナに手を伸ばし、私の肩を掴みながら、このようなことを言いました「お前は俺たちのテーブルへくるんだよ」と。ダイアナがこの乱入者に対し痛いことを告げると、彼は私に「俺とお前が地下に行くか、駐車場へ行くかだ」という趣旨のことを言ったのです。

そうして、彼は私をそこから引きずり出し、ダイアナを床に倒し、テーブルもその上の陶器やナイフ、フォーク、料理や飲み物、ろうそく、テーブルの上全てのものをひっくり返したのです。私は顔を床に向けて倒れました、そして見上げると、靴が見えました、ハイヒール、お皿、拳骨、その他諸々の物が私の顔に向かっていました。私は突然ストックホルムでのアンドリュー・ヤングのレッスンを思い出しました。私は公民権運動の屈み込みの態勢を取りました、両膝を私の顔の前にくっつけ、両手で頭を覆いました。

そして物凄いわめき声と悪態が加勢に来たその乱入者達の他の仲間から湧き上がっていました。ジョン・ウェインタイプの酒場の取っ組み合いが続いて起こりました。そして、そのレストランの関係者の誰一人として、それを止めようとしなかったことを後で私は知りました。

何人かが、誰だか私はわかりませんが、私を立たせ部屋の向こうのテーブルに顔を押し付けました。シャロンはその一団の女性陣の一人から拳で攻撃されました。この時点で、私はこの酔っ払いのギャングどもからなんとか抜け出し、彼女たちに直ちに店を去るべく指示を出しました。私の右目が腫れているのがわかりましたし、鼻梁にかき傷があるのを感じました。私のワイシャツの胸も引き裂かれていました。

シャロンは具合が悪くなり化粧室へ行き、その時攻撃してきた女性の一人がお皿を拾い私に投げつけようとしてきました。メアリー・デビッドソンがそれを手でたたき落としました。私たちが去ろうとしたとき、別の女性が私たちを止めました。彼女は、この出来事にとっても困惑しており、これは私の責任ではない、証人になっても良いと言いました。

私は店を出ようとして、メアリー・デビッドソンに、まだ化粧室にいるシャロンを連れてきてもらえないかと頼みました。 駐車場係りが私の車を回して来て、私が乗り込むと、別の女性が開いた窓からバッグを私に投げつけました。そしてそれが私たちのマタドールでの、静かで、くつろいだ夕食の最後でした、いつものハリウッドの主流ではないが故に気に入り、良く訪れたレストランでした。 言うまでもなく、二度と訪れることはありませんでした。

翌日、私は「アングル」の脚本家の一人であり弁護士でもある、ピーター・アラン・フィールドに話し、貰った名刺を渡しました。 彼は「ジョン」と連絡を取ることができ、そこに居てその大騒ぎに関わった他の人たちの名前も手に入れました。ジョンはピーターに完全に自分が悪かったと認め、更にその時全員が酔っ払っていたことも認め、皆どんなに申し訳なく思っているかを告げました。

それから間もなくして、1968年2月14日に私の弁護士ガイ・ウォード、前カルフォルニア弁護士協会会長、から“ジョンが「不抗争の答弁」申し立てをしたため、罰金と実刑の判決が執行猶予になったと理解する”と言う手紙を受け取りました。 彼は、私がこの件について民事訴訟として提起する期限は1968年10月13日であると述べてその手紙を締めくくりました。そして私はほぼ確実に訴えるつもりでした。

しかしながら、私がガイの手紙を受け取った後、どういうわけかマタドール紛糾の影を薄くする二つの国際的な事件が起きたのです。

1968年8月、プラハで私が「レマゲン鉄橋」を撮影している時、ソ連がチェコスロバキアに侵攻しました。一週間軟禁された後に、私はチェコ・オーストリー国境まで連れていかれ、そしてやっと解放されました。

私がヨーロッパを去る頃の1968年10月までに、ガイ・ウォードは私の友人ロバート・ケネディ殺害の罪で告訴された男 - サーハン・サーハン - の主任弁護士として雇われていました。

私は事件を取り下げることにしました。